

## マックス・E・アマンの 世界馬術界展望

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、障害飛越のワールドカップを創設しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

text: Max E. Ammann design: DynamiteBrothersSyndicate

# 偉大なる 障害飛越馬の 記憶

**今**年の1月初旬、ワールドカップのファイナルで2度の優勝を遂げたヒューゴ・サイモン選手が、ETが27年の生涯を閉じた。この優れた障害馬の死の報に接し、1997年に『L'Année Hippique (競技年報)』のために行ったアンケート調査のことが脳裏に蘇った。

その調査とは馬術界で著名な37人に1945年以降に活躍したもつとも優れた障害馬を選んでもらうというものだった。事前に100頭に絞ったリストを送り、そこから10頭を選び順位をつけるよう依頼した。37人全員から戻った回答には戦後の名だたる10人の選手の名も記されていた。ピエール・ジョンケレス・ドリオラ、ジ

ーン・ドリゲイックス、ハンス・ギュンター・ウインクラ、ウイリアム・ステインクラウス、ジョージ・モリス、ハリー・ルウエリン、ネルソン・ペンア、カルロス・デリア、アーウィン・シヨッケメーレ、バート・デ・ネメシーだ。この調査は馬の順位を決するためのもではない。しかし、最初の回答からハルラとミルトンが1位を争っていた。ハルラは56年、ハンス・ギュンター・ウインクラが騎乗して金メダルを得た馬であり、ミルトンはジョン・ウイックタカーの芦毛の駿馬だ。最終的に37のすべての回答を得た時点でともに33ポイントを得て1位を分け合うことになった。24ポイントで3位となったのがピエール・デュランの88年の金メダル馬、ジャブループだ(\*)。4位は20ポイントを獲得した前述のET。5位が18ポイントの60年に金メダルを得たレイモンド・デインツイオが乗るメラノ、6位は89年、90年とワールドカップで連勝したイアン・ミラーのビッグベンで15ポイントを獲得した。7位には4頭の馬が並んだ。ハリー・ルウエリンのフォックスハンター、ピエット・レイメーカーズとルドガー・ピアバウムが騎乗したラティーナ、3度のヨーロッパチャンピオンに輝くポール・シヨッケメーレのデイスター、エディ・マッケンのブーメ

ラン。このブーメランはどの種目にも強く、スピード競技でも障害の高さを競う競技でも、そして最終的にグランプリも勝ち抜く力を備えていた。10頭のうち8頭はせん馬でハルラとラティーナのみが牝馬だ。3頭がドイツ産、2頭がイギリス、ベルギー産、フランス、イタリア、アイルランド産が1頭ずつだ。97年のアンケートの結果、11位から25位にはグランジュエツ、ジエムツイスト、ミスター・ソフテ、メテオール、ジェットラン、スノウバウンド、フランボウ、グランドストン、シモナ、ジェシカという著名な名馬が含まれている。この障害飛越の名馬を年代で区切ると1950年代に活躍したのがハルラ、メテオール、フォックスハンター、メラノであり、60年代はグランジュエツ、ミスター・ソフテ、70年代はブーメラン、グランドストン、ジェットランが活躍した。80年代にはミルトン、ジャブループ、ビッグベン、デイスター、ジェムツイスト、ジェシカなど綺羅星のような馬が揃っている。97年までの90年代をリードしたのはラティーナとETだった。このアンケートの結果含む『ラネ・イピック』を発行して数カ月後の98年4月、ロドリゴ・ペンア騎乗のブルーベ・ドウ・ルーエが初めてワールドカップで優勝し、99

年、2000年と勝利が続いた。これに続く3年間、ガルベの子、ブルーベ・ドウ・ルーエは毎回3位以内を守った。つまり、98年から2003年までに1位、1位、1位、2位、3位、2位を記録した。この記録をもってすれば、後年の名馬選出の投票でトップブレン入りが間違いないだろう。

そのほかの2000年のシドニールオリンピックまでに活躍した馬としてウイリ・メリガーのカルバロ、アレクサンドラ・レダーマンのロッシエM、ラース・ニールグとマークス・アーニングの騎乗したフォープレジャー、ティエリ・ポメル、ソー・デ・チェインズ、そしてシドニーの優勝馬、イエエル・デューベルダムのスジエムが

右:88年、ソウルオリンピックでのピエール・デュラン選手騎乗のジャブループ。  
左:92年、バルセロナオリンピックでのラティーナ選手騎乗のラティーナ。  
©Kit Houghton





1997年、プレーメンで開催されたドイツクラシックでのヒューゴ・サイモン選手とET。

©Bongarts/Getty Images

### マックス・E・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰め外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えられる。そのかたわら、馬術競技観戦が趣味だったことから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟(IAEJ)の会長に就任。78年新聞社を退社。以降、馬術のさまざまな大会でディレクターを務めるなど、多大な貢献をしてきた。

\*昨年、フランスでジャブループがソウルオリンピックで金メダル獲得を獲得するまでの道のりが映画化され、今年3月からフランス本国で公開が始まった。監督はクリスチャン・デュゲイ、主演のピエール・デュラン役はアカデミー主演女優賞受賞(『エディット・ピアフ〜愛の讃歌〜』)のマリオン・コティヤールのパートナーであるギョーム・カネ。監督、主演ともかつては障害の競技者で、とくにギョーム・カネはジュニアのときフランス・ナショナルチームに選出された実力を持つ。日本での公開が待たれる。

ただし、この21世紀の名馬が戦後以降のトップテンに入ったかどうかは誰にも分からない。97年のアンケートに回答を寄せてくれた人たちの多くがすでに鬼籍にあり、もうその答えが返ってくることはないからだ。

挙げられる。シドニー以降、今世紀に入ってからに数頭の名馬が現れた。01年のワールドカップ・ファイナルで優勝したマルクス・フックス騎乗のティンカズ・ボーイ、06年の世界選手権でジョス・ランシク騎乗のクマノ、北京オリンピックの優勝馬、エリック・ラマーズ騎乗のヒクステッド。この馬は一昨年の競技中に惜しくも亡くなったことでも印象深い。そして、ワールドカップ3度優勝を遂げたメレデス・ミシエルIIピアバウム騎乗のシヤターフライがいる。さらには、クリステイナ・リープヘル、ロー・マーシー、ロフルIIゴラン・ベンクトソンのピアロット、クリチャン・アーマンのコスター、オット・ベッカーのセント、マリン・バーヤードのバタフライ・フリップ、そして最後にアメリカのオーセンティック、サファイア、セラだ。